

【第十一回】「毛筆の基礎・基本とその書き方」

— 実力向上のための学びの指標（段位認定試験の課題に学ぶ5） —

静岡大学教授  
本誌手本揮毫者

杉崎 哲子

◇はじめに

これまで様々な古典を取り上げ、学習方法を述べてきました。既にご承知のとおり、漢字、仮名、漢字仮名交じり等、全ての学習を同時進行したり、急いで試験課題だけを間に合わせに書いたりしているようでは、確かな力にはなりません。

本講座も、残すところ二回となりましたので、系統性を重視した学習の進め方を、説明していきます。

■学習の系統的な進め方

本講座の第七回（平成28年10月号）では、初段から四段の段位認定試験課題の例を挙げまし

た。また、それを指標にして、「高等学校芸術科書道」のように基礎から発展へと体系化された学習をしていただきたいとも述べました。しかし、それだけでは漠然とし過ぎていて、何から着手すればよいのか、分からないのが正直なところかもしれません。そこで、学習の系統的な進め方を確認することにしませう。

大事なことは、まず、小・中学校で学習する書写的な文字を確実に書けるようにすることです。「書道」の学習の基盤は、「書写」にあり、書写で扱う整齊な文字が初唐の古典に由来していることは、既に述べてきた通りです。そのために敷居が高く難しいと考える人がいるかもしれませんが、また、一方では、メディア等でいろいろな情報が溢れる昨今、「書道」は自由度が高く、"なんでもあり"といった誤った認識を抱く人もいます。確かに、文字の書

きぶりは個性でもあり、様々な表現を楽しむことも、素晴らしいことです。しかし、指導的な立場になることも想定して学ばれているのであれば、基盤的な学習、つまり書写の学習は不可欠です。それを十分にやらずして文字をデザイン的志向で大幅に変形させていくことを覚えてしまつては、単に趣味で行う場合であっても、技能の向上は望めないでしょう。

具体的には、本誌の月例課題の「規定毛筆」にある小・中学校の課題によって、書写的な文字を確認されるようお勧めします。

次に、初段の楷書課題に取り上げられている古典を中心に臨書し、字形のとらえや用筆を学びます。その後、行書課題へと駒を進めるのが一般的です。

行書では、特に強く「気脈」への意識が求められます。月例の臨書課題では、解説部分も

活用して、その用筆を学びましょう。  
 さらに、収め方が重要であることや、二つの  
 古典の比較によって特徴をはっきりさせること  
 なども、既に述べてきた通り重要です。

■ 創作課題に取り組む

臨書学習では、例えば、いつ行書を開始する  
 か、どの古典に取り組むかにかかわらず、そこ  
 には、臨書する課題の文字が提示されます。し  
 かし、「創作」には、それがありません。ここ  
 ではじめて、臨書で身につけた技能をもとに、  
 自分で表現する力が試されるのです。

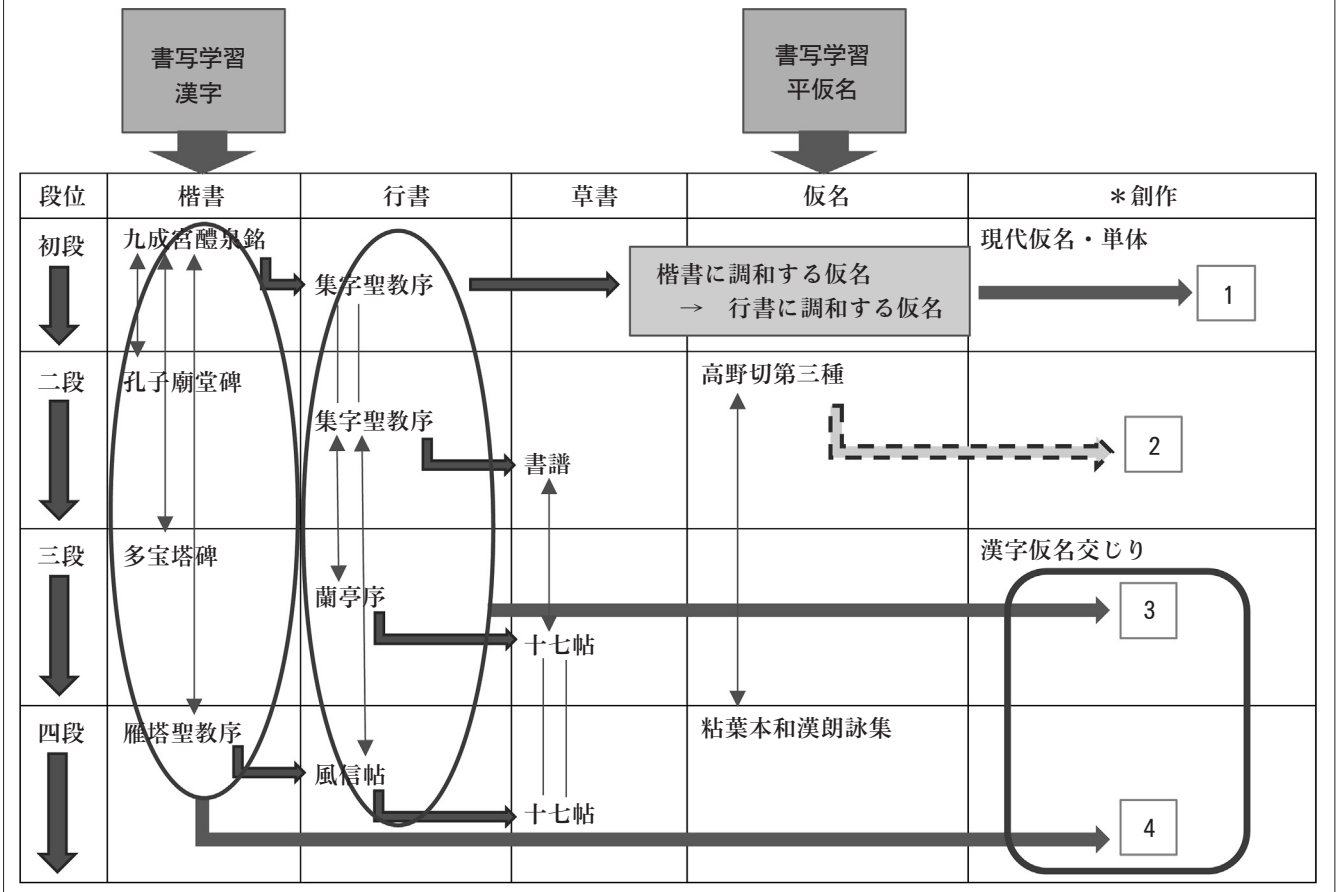
ところで、漢字の創作では、導入段階に「倣  
 書」がよく活用されます。しっかりと古典の特  
 徴を理解して書けるようになるには、倣書が有  
 効です。

**\*倣書**  
 碑文や法帖から感じられる結構（形の  
 取り方、字形の構成／主に楷書に用いる）、  
 結体（結構と同義／主に行書・草書・仮名  
 に用いる）や特徴をもとにして、碑文や法  
 帖の文字とは別の文字を素材とし作品をつ  
 くること。

《参考》『書写・書道用語辞典』第一法規

もともと「古  
 典」といわれる  
 もののない「漢  
 字仮名交じりの  
 書」は、「創作  
 した漢字」に仮  
 名を調和させる  
 こととなります。  
 下に、初段か  
 ら四段までの各  
 段位の課題（例）  
 の系統性と学習  
 の進め方を示す  
 表を作成し、載  
 せました。  
 ここでは、系  
 統性が分かるよ  
 うに、楷書課題  
 からは太い矢印  
 （横）で段位内  
 での学習の流れ  
 を、細い矢印  
 （縦）は古典相  
 互の比較や関連  
 を示しました。

段位別の課題の系統性と学習の進め方



## ■「漢字仮名交じりの書」とは

「漢字仮名交じりの書」とは、漢字と仮名の混じった語句や詩文（詩や短歌、小説、俳句、歌詞など）を書いたものです。

現代では、日常的に使用する漢字や平仮名、片仮名などを題材とした書のことを指しますが、平安時代にも、漢字と仮名を混在させた和歌や物語が書かれていました。

江戸時代になると、公用の文書や学術的な文書の多くは漢文で書かれており、書作としても、伝統的な漢字や仮名の書が主流でした。しかし、実用的な文書の場合は漢字仮名交じり文が使われていました。

そして明治時代になると、公的な文書なども漢字仮名交じりで書くようになり、一般大衆にも広まってきました。

## ■学習の進め方と「漢字仮名交じり」課題

さて、初段（二段、三段、四段）の段位認定試験に向けては、どのように学習を進められると系統性が確保できるでしょうか。

前頁下段の表の中にある楕円<sup>だえん</sup>で囲んだ部分は、「楷書学習」と「行書学習」をまとめたものですが、例えば初段で、書写学習の「漢字」をべー

スに、「九成宮醜泉銘」に取り組んだとしましょう。それから、行書の「集字聖教序」へと進む流れは自然で、もし、この段階で「漢字の創作」が課題になったならば、「九成宮」や「集字」の做書で創作するのが、無理のない形<sup>かたち</sup>で既習<sup>きしゅう</sup>内容を生かしたことになります。

しかし、実際の初段の創作課題は「現代仮名の単体です（前頁表①）。そうになると、事前に「書写学習」の「仮名」を確認しておかなければ、創作など、とてもできません。

また、楷書よりも行書の学習の方が「仮名」の筆使いへと移行しやすいということを考えると、「行書」の学習は、行書の創作に生かせるだけでなく、「現代仮名」の課題としても有効であるということになります。

次に、二段での課題は「仮名」古筆<sup>こひつ</sup>の臨書ですが、続く三段の「漢字仮名交じり」の課題の際には、必ずしも仮名の古筆のように書く（表②）ことを要求されているわけではありません。

本連載第九回（平成28年12月号）にも述べましたが、仮名も草書の臨書もまだ不十分な状態であるならば、背伸びをして古典的な仮名古筆のように創作する必要はないのです。

むしろ、書写的な漢字とそれに調和する仮名でしっかりと書きまとめることが大事で、それは着実に基礎力を固めている証です。言い

換えれば、段位認定試験を指標にして系統的な学習を進めることになります。

仮名の連綿<sup>れんめん</sup>などもすっかり書けるようになったならば、古筆の雰囲気も取り入れて、書きまとめるとよいでしょう。

花園大学名誉教授・中島晴象<sup>なかしまはるしょう</sup>先生は、奨励する「現代書の学習法」として、次の三つを示されています。

- ① 和様・唐様<sup>からよう</sup>を問わず、感受位の古典的資料のうち、隷書<sup>れいしよ</sup>・楷書・行書の範囲、つまり現代人の文字的教養の範囲で書風を選び、半紙三行・十五文字程度の臨書を開始する。
- ② 原本の拡大臨書の際に、多分に創造性を加味して、模写性<sup>けいりゃん</sup>（形臨）に執着しない。
- ③ 漢字臨書の進行次第で和訳（釈文による）し、仮名を交えてみる。漢字と漢字の間にはいる仮名の造形を工夫し、調和をはかる。

（参考）『墨書の技法指南』芸術新聞社、一九九四年八月臨時増刊

\* 和様：日本独特の様式。平安中期より明治初年までを中心に発生・展開した日本風の書流の総称。  
\* 唐様：中国風の様式。狭義には、江戸時代隆盛をきわめた御家流に対し、当時、儒者・文人の間に流行した元・明時代の書風をいう。

《参考》『書写・書道用語辞典』第一法規

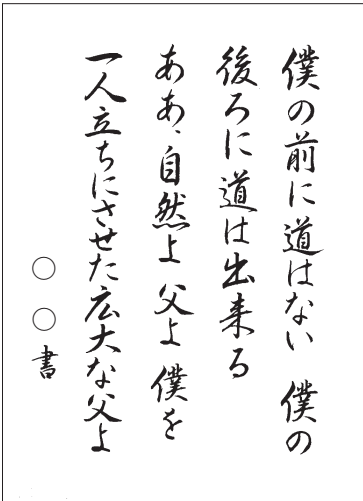
このうちの③が、表で示した「漢字の学習から漢字仮名交じり書へと進める流れ(③④)」ということになります。②のような創造性に富んだ「漢字仮名交じりの書」を書くということは四段の時期では難しいので上級の段位になつてから取り組まれるとよいでしょう。

結局は、漢字や仮名の基礎的な学習や臨書を真面目にやることが重要です。

では、実際にどのような作品を書けばよいのか、過去の漢字仮名交じりの書の作品を例示して、解説しましょう。

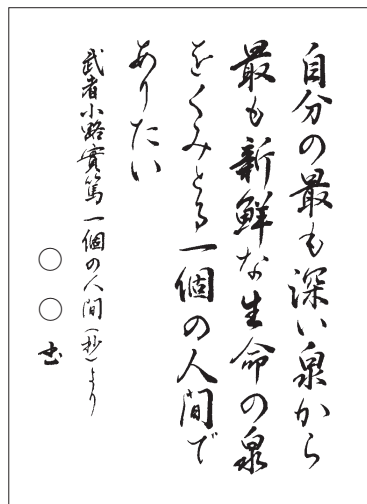
作品Aは、行頭を揃え言葉の区切りで改行しているので、整然とした印象を受けます。

それに対してBは、行頭と行末を揃えて書いています。少し連綿を加えて流れを強めただけでなく、墨の濃淡によって奥行きをも感じさせる作品に仕上がっています。

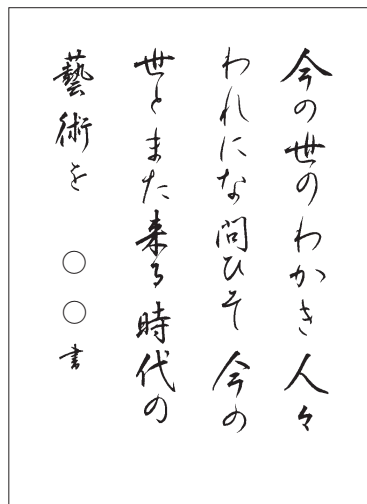


A 三段受験優秀作品  
(漢字仮名交じり/創作)

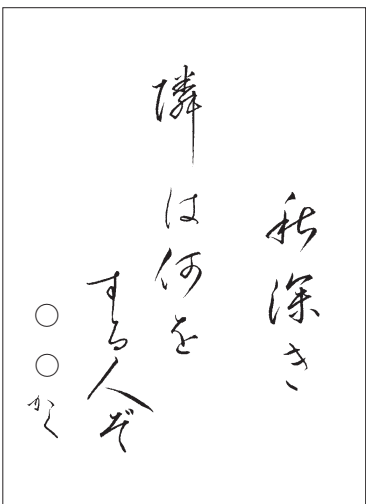
Cも同様に行頭と行末を揃えて書いていますが、平仮名は古典の仮名の雰囲気強く出しています。さらに進めて「散らし」にしたのが、



B 四段受験優秀作品  
(漢字仮名交じり/創作)



C 四段受験優秀作品  
(漢字仮名交じり/創作)

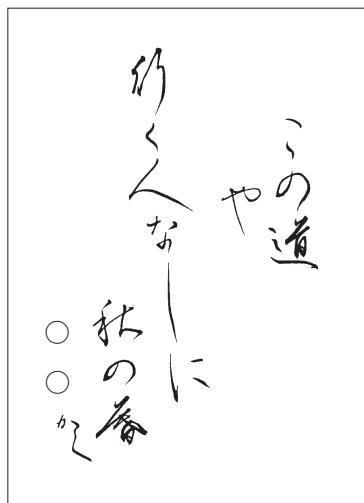


D 三段受験優秀作品  
(漢字仮名交じり/創作)

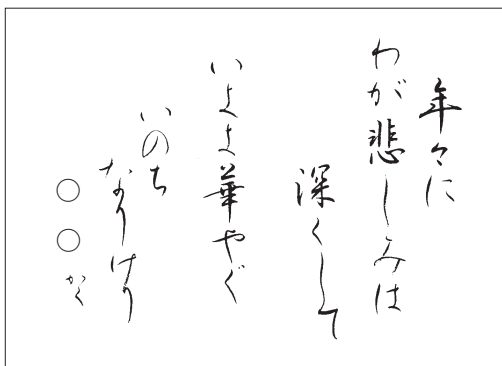
DとE、Fです。

福島林邨先生が段位認定試験の結果を受けて、「字種変換不可の課題で踊り字を使用していた」と講評されたことがありました。

どんな風を書くか、どんなおさめ方をするか以前に、しっかりと課題に関する指示を確かめて書きましょう。



E 三段受験優秀作品  
(漢字仮名交じり/創作)



F 四段受験優秀作品  
(漢字仮名交じり/創作)